

訪問者村井

人 物

浅海 耀 (15) 小樽三葉高等学校 2 年生。

陽川 明久 (16) 小樽三葉高等学校 2 年

生。浅海の同級生

谷川 太一 (15) 小樽三葉高等学校 2 年

生。浅海の同級生

店主 (72) BookXcess の店主。

○北海道小樽市小樽堺町通り（夕）

灰色の空から静かに、小さな雪の粒が舞い降りている。

小樽堺町通りの道路脇には30cmばかり積み上げられた雪の壁があり、浅海（15）、陽川明久（16）、谷川太一（15）の3人は転倒しないよう、ゆっくり歩いている。

谷川「ねえ、まだ？」

陽川「もうちょいだって、我慢しろや」

浅海と陽川が前を歩き、谷川が不服そうな顔をして後方を歩いている。

浅海は携帯を触りながら後方にいる谷川に向かって

櫛「たいちゃん！あと3分やで！」

谷川「もう3分って……。こんな転ぶんだっ

たら、駅前のゲーセンが良かったわ」

陽川「俺のせいにすんなや。じゃんけん負けたのお前だべさ？」

谷川「それくらい分かっているけどさ」

陽川はおちよくなるような顔で

陽川「あと、行っていたとしても、俺が勝つからどっちみち拗ねることになるで」

谷川「は？あの時、勝ったのはまぐれだべ」

陽川「違いますー、実力ですー」

谷川「まぐれですー」

浅海「ほら、見えてきたで」

浅海は前方を指差す。

○同・BookXcess・外（夕）

『BookXcess』と書かれた看板。

ビンテージ感のある古書店の目の前に

浅海らは到着する。

谷川「古！本当にここ？」

谷川は不安そうな顔で浅海に尋ねる。

浅海「うん、合っているよね？」

携帯の画面を陽川に見せる浅海。

陽川「うん、合っている」

谷川「まじ？尚更ゲーセンが良かったべ」

陽川「人の趣味に四の五の言うなよ」

陽川、鈴の音が鳴り響く扉を開け、足速に店内へと入っていく。

浅海「意外と掘り出しもんとかあるかもよ」

谷川を諭しながら、浅海も店内へと入っていく。

谷川「マジかよ」

谷川は重い足取りで店内へと入る。

○同・BookXcess・書物ブース（夕）

陽川「すみませーん」

店内は静かであり、沢山の書物が壁一面に収納されている。

陽川「うわー、こりやすげーわ」

感嘆した表情をする陽川と浅海。

一方、への字口をする谷川。

陽川「これとかなんて書いてんだよ」

近くの洋書を手に取り、不思議な表情を浮かべる陽川。

谷川「てか、店員さんいないね、なしてこんな人おらんかね」

浅海「ね！」

陽川「（笑いながら…）すげー、全然読め

ね」

谷川と浅海は辺りを見渡す一方、陽川は洋書に夢中になっている。

浅海は陽川に向かって、

浅海「とりあえず俺、あっち探してくるわ」

陽川「おう、とりあえずアイヌって書かれて
いるやつあったら教えて」

谷川「あと、店員さんもいたら教えて」

浅海「はいよ」

浅海は陽川らの元から離れていく。

陽川「すげー、女体が描いているよこれ」

谷川「どれ？見して？：うわお、女豹」

陽川「嫌いじゃないですね」

谷川「私も同感です」

○同・BookXcess・雑貨ブース（夕）

別ブースへと移動してきた浅海。

先ほどの部屋から一変、映画のポスターが壁一面に掲載され、部屋中央に設置されている机には雑貨類が沢山陳列されている。

浅海「まじですごいな」

浅海は壁面のポスターや陳列されている商品をまじまじと見る。

浅海「これなんやろ」

机に陳列されているパンフレットを手取る浅海。

浅海「シザーハンズ…。3290円。高いな」

不服そうな顔で元の位置に戻す。

浅海「なんか買えるものないかな」

再度陳列されている商品を見る浅海。

浅海「おっ、140円」

マッチを手取る浅海。

マッチにはテラード姿かつ髭を蓄えた中年男性の絵が描かれている。

浅海「なんだマッチかよ、使わね」

浅海はマッチを元の位置に戻す。

浅海の背後から突然、店主（72）が
姿を現し、声をかける。

店主「いらっしやい」

突然の語りかけに驚く浅海。

同時に陳列されている商品を幾つか床
に落とす。

浅海「（驚きながら…）お邪魔しています。

……あつ、すみません、すぐ直します」

浅海は店主に挨拶をした後、急いで床
に落ちた商品を拾おうとする。

店主は杖をつきながら、ゆっくりと浅
海の元に歩いて来る。

店主「膝が悪くてね」

浅海は店主を見上げる。

店主「君の思うがままでもいいから、商品を並
べ直してくれないか？」

浅海は店主を見上げながら、コクリと
頷く。

パンフレットを手を持っている浅海。

浅海「このパンフレットは確かこちら辺に」

パンフレットを机の上に置く浅海。

店主は浅海の横に立ち、商品を陳列させる様を観察している。

ポストカードを手取る浅海。

浅海「これはここに、これもここ、ここ、」

次々と商品を陳列させていく浅海。

浅海「そして、このマッチは」

浅海は先ほど手にしていたマッチを

元の場所へと戻す。

店主「どれ。：おー、すごい。ほぼほぼ完

璧だよ」

浅海「え？どこが間違っています？」

店主「間違い？間違いなんていいんだよ、君の直し方が見えたことが大切なんだよ」

浅海「いやでも違うんですよね？直します」

店主「いいんだよ、気にすることじゃない。

とにかく、ありがとう」

店主はゆっくり浅海にお辞儀をする。

浅海も応えるようにゆっくりとお辞儀をする。

店主は先ほど浅海が陳列したマッチをゆっくりと手に取り、浅海に渡す。

店主「そうだ。これ、もし良かったら」

浅海「くれるってことですか？」

店主は笑顔でコクリと頷く。

浅海「いや、でも僕は多分そんなに使わないかと……」

店主はゆっくりと浅海の手の上にマッチを置く。

店主「不必要だろうけど、それが火種となる」

浅海は目を丸くしながら店主の顔を見つめる。

陽川「浅海？」

陽川と谷川が雑貨ブースに入室する。

陽川「浅海、見つかった？」

浅海「あー本？ここにはなさそうだよ」

陽川「なんだよ、ってことはこの一冊だけか」

陽川と谷川は店主の存在に気づき、会釈をする。

陽川「えっと、お店の方ですか？」

店主は笑顔でコクリと頷く。

陽川「じゃーこの本買いたいので、レジいいですか？」

店主「もちろん」

店主は遅い足取りでレジへと向かう。

谷川は浅海に対して小声で、

谷川「店員さんいたら教えろって言ったべ？」

浅海「おん、ちょっと呆氣に取られて」

浅海、手に持っているマツチをポケットに入れる。

○同・BookXcess・外（夕）

ookXcessから出てきた浅海ら三人は歩きながら次の目的地を決める。

谷川「この後どこ行く？」

陽川「とりあえずゲーセン？」

谷川「いいの？」

○同・BookXcess・バックヤード（夕）

店主が白湯を飲みながら、一人で小言を發している。

店主「すみませんね、私の身勝手な行動で」

店主の目の間には誰もいない。

店主「……一応言っときますが、現代ではあまりマツチは使いません。なので、登場頻度はあまりと言った感じですが」

店主「……そうですかね？あなたにとって
も貴重な体験になると思いますよ」

店主が白湯に口をつける。

店主「楽しみですね」

店主はニヤリとニヤける。

店主「その髭、今風に整えましょうか」

（了）

